よみがえる自転車大競走 【1面に本記】

半島生かし 長距離一直線

ツール・ド・のと源流に触れる

石川は「レース好適地」

29日に行われた「北國新聞社自転車大競走」の再現イベントでは金沢を出発点に、参加者が二手に分かれて七尾、加賀のゴールを目指した。南北に細長い石川の地形を生かした、ほぼ一直線の長距離コース。七尾を目指す東コースの一行に同行し、風光明媚な能登半島を一周する「ツール・ド・のと400」（同実行委、北國新聞社主催）の源流に触れた。

（社会部・北村拓也）

本社記者ルポ

明治の自転車大競走は、金沢の尾山神社を起点に、西コースは大聖寺までの往復96㌔、東コースは七尾までの往復128㌔でタイムを競った。今回は片道だけを再現し、大聖寺まで49・7㌔、七尾まで69・4㌔となる。

明治の頃はまだ、自転車自体が珍しかった。金沢市統計書によると、明治39年の市の人口10万3554人に対し、市内の自転車台数は182台。医師などの富裕層や配達従事者くらいしか乗る機会はなく、欧州製のレース仕様車は近代化を象徴する高性能マシンに見えただろう。

令和の今、サイクリストの姿は珍しくなく、公道を走っても驚く人はいない。東コースの5人は国道159号などで北上するルートで、内灘から津幡町、かほく市を経由し、宝達志水町へと進んだ。瓦ぶきの昔ながらの家が連なる町並みの先には、青々とした水田と山が青空の下に広がった。参加した伏見高1年の唐木雲實さん(15)は「能登らしい景色で、気持ちよく走れた」と汗を拭った。

羽咋市飯山町を過ぎてしばらくして、中能登町小竹付近で数百㍍の上り坂が続いた。当時の本紙には「飯山の向なる小竹坂」が最大の難所とある。飲食店経営の新出洋さん(46)＝穴水町＝は「軽いロードバイクならそう難しくないが、明治の重い自転車で未舗装だったら、過酷な坂だったろう」と思いをはせた。

もっとも、過酷さといえば、現代のツール・ド・のとも負けてはいない。能登半島を3日かけて一周するレースはアップダウンが激しく、総距離は400㌔にも及ぶ。サイクリストのあこがれの大会となっている。

「自転車競技の人気が高い欧州でツール・ド・のとのロケーションが知られれば、海外からの参加希望も増えそうだ」。先導車を運転した自営業古林一志さん(46)＝金沢市＝は指摘した。

明治の大会のルート図をみると、石川県に背骨が一本通ったように真っ直ぐな行程だ。考えてみれば、同じ道を一度もたどらず、ひたすら前へと進んでいけるのは贅沢なコース取りと言える。117年前からよみがえった自転車競走を取材して、自転車レース好適地としての石川の可能性をあらためて感じた。

松並木沿いを疾走する参加者＝小松市安宅町

手を上げてゴールした東コースの一行＝七尾駅前

北陸新幹線白山総合車両所を背景にペダルをこぐ参加者＝白山市北安田

坂道を上る一行。117年前の大会で難所とされた＝中能登町内

大阪の新家工業参加 山中で創業、自転車関連企業

◇…西コースには、加賀市（旧山中町）で創業した自転車関連企業、新家工業（大阪市）の社員も参加した。大聖寺駅に到着後、山中工場まで足を伸ばし、浜田哲洋常務や社員から歓迎を受けた。

社員の永井庸平さん(42)＝加賀市山中温泉塚谷町1丁目＝は「日本海を横手に走るのは爽快で、安宅の関を通るなど歴史も感じた。自転車部品の製造に携わる者として最高の大舞台だった」と振り返った。

ひゃくまん 穀 ユニホーム着用

◇…参加者は、ツール・ド・のと400に特別協賛するJAグループ石川「ひゃくまん穀」の文字が記された鮮やかな赤色のユニホームを着て、加賀路と能登路を進んだ。

一青妙さん 117年前に思い

本紙でエッセー連載

加賀路完走「楽しい」

西コースには、北國新聞朝刊で「人生妙なり」を連載するエッセイストで俳優の一青妙さんが参加した。「文明開化の象徴である新聞と自転車が重なり合って実現した」と117年前の大会に思いをはせ、9月16～18日のツール・ド・のとに出場する意向も明らかにした。

今回走った加賀路はツール・ド・のとのコースになっておらず、一青さんにとっても初めての走行となった。「アップダウンがなく道幅も広い。ファミリーでも楽しく走れる」と語った。

健康志向の高まりで自転車ロードレースが各地で催される中、ツール・ド・のとを海外でもっと周知すべきだと話す。「小松―台湾便を生かし、台湾への発信に力を入れてほしい」と訴い、台湾で知名度の高い加賀温泉郷とロードレースを組み合わせたサイクルツーリズムも提案した。

完走後に西コースの印象を語る一青妙さん＝ＪＲ大聖寺駅前

ツール・ド・のと出場表明

曾祖父 明治に審査員

石野さん「歴史つないで」

117年前の自転車大競走の協賛企業として当時の紙面に金沢市石浦町の自転車店「石野商店」の広告が載る。石川県内で最も古い明治26年に創業し、現在も同市額新保1丁目で「スポーツサイクル・イシノ」として営業している。店主の石野敏久さん(75)は毎年、ツール・ド・のとで参加者のサポートにあたり、曾祖父は明治の大競走で審査員を務めた。石野さんは「石川の自転車レースの歴史は古い。これからもつないでほしい」と話した。

石野さんによると、曾祖父の石野義延さんは加賀藩に仕え、幕末は鉄砲隊。明治期になって鍛冶店を営み、金沢にいた宣教師から自転車の修理を頼まれたことがきっかけで、自転車店を開いたと聞く。

「曾祖父が自転車競技に関わったと聞いたことがあるが、こんなに大きな大会だとは思わなかった」と笑い、自身が現在ツール・ド・のとに携わっていることに不思議な縁を感じるという。

「県内ではサイクリングルートの整備も進んでいる。これからも、ツール・ド・のとがある石川が自転車の面白さを伝える舞台であってほしい」と期待した。

100年以上前に作られた自転車を紹介する石野さん＝金沢市額新保1丁目

石川最古の自転車店主